




学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	本岡 勉
審 査 員	主 査	堀川悦夫	
	副 査	倉岡晃夫	
	副 査	浅見豊子	
論文題名	題 名 Foot pressure distribution in patients with gonarthrosis 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 The Foot 22 (2012) 70-73		
論文審査結果の 要旨	<p>本論文では、歩行時に膝関節のアライメント異常の代償機能について足底部の圧分布計測から検証している。対象者は片側変形性膝関節症患者 46 例 46 足(平均年齢 69 歳)であり、通常歩行時の足底圧中心をセンサシートにより計測した。</p> <p>対象者を膝外側角 (FTA) から外反群 7 例、内反群 20 例と中間群 19 例に分類し (1) 足部中央での足圧中心の通過部位 (PSI)、(2) 中足骨頭部での足底圧分布様式の種類と頻度を指標とした。</p> <p>【結果】(1) 中間群、内反群の PSI は外反群よりも有意に外側を通過し、FTA と PSI に正の相関が認められた。(2) 外反群は内側に、内反群は外側に足底圧が集中するパターン、そして (3) 外反群は第 1 趾を、内反群は第 2 趾を足圧中心が通過するパターンの頻度が高かった。</p> <p>【考察】歩行周期の立脚期後半 (前・中足部接地時) においては、膝関節に由来する高度な下肢アライメント異常は完全には代償されない。その理由として、構造的に遠位部 (前足部) ほど大きな動きが必要になるためと考察した。また、膝に変形がある症例では下肢アライメントを考慮した足部手術や装具が必要である。</p> <p>以上の成績は、下肢のアライメント異常の検出及び代償機能について臨床的に新しい知見を加えたものであり、意義あるものと考えられる。</p> <p>よって本論文は、博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認めた。</p>		
学力の確認の結果の 要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行い、整形外科の臨床での知見に加え、解剖学やリハビリテーションそして運動計測の領域に関して種々質問を行い、特に用いた測定法と臨床応用の妥当性について詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。</p> <p>また、専攻学術領域に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。</p> <p>外国語能力に関連して多方面からの試問を行い、先行研究のみならず測定の技術的問題点に関して海外の動向や研究を充分整理・活用しており、外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。</p> <p>よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。</p>		

学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	岸川陽一
審 査 員	主 査	堀川悦夫	
	副 査	藤田君支	
	副 査	山下 秀一	
論文題名	<p>題 名 Initial non-weight-bearing therapy is important for preventing vertebral body collapse in elderly patients with clinical vertebral fractures.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 International Journal of General Medicine, Vol.5, 373-80, 2012.</p>		
論文審査結果の 要旨	<p>本研究の目的は、脊椎椎体骨折に対する保存的治療において、安静度の異なる「非荷重安静」と「一般的安静」の2種類の治療法の比較を行うことである。</p> <p>対象者は1999~2007の間に脊椎椎体骨折にて入院治療を行った65歳以上の患者196名(211椎体)であった。非荷重安静群103名は、受傷後の初期において排泄や食事の際にも一度も起座させないで安静を保つ(通例では2週間程度)群である。必要に応じて起座を許す一般安静群は93名であり、その後の処置(寝返りしても痛みがないことを目安に、軟性コルセットを装着して離床する)は同一であった。分析に用いた指標は、脊椎椎体骨折の骨癒合までのX線学的形態変化(重症度の変化)及び脊椎椎体骨折の骨癒合率、痛み、合併症についてであった。統計解析から、①骨癒合までに生じる椎体前縁高および後縁高の損失は、非荷重安静群のほうが、一般的安静群に比べて有意に少ない、②受傷後2週間以内に治療を開始した場合、骨癒合までにかかる時間は、非荷重安静群の方が有意に短い、③非荷重安静群に比べ、一般的安静群に痛みの残るものが多いという結果であった。</p> <p>本研究では、初期に非荷重安静をする治療では、従来の一時的安静に比して、有意に形態的に圧潰せずに、即ち重症度を増さずに骨癒合する事が示された。</p> <p>これまで脊椎椎体骨折の保存的治療と安静度の考え方にはエビデンスが少ない上に、臨床研究の制約からバランスのとれた実験計画を組むことが困難な中で、臨床経験から得られた知見をもとに検証を試みた貴重な研究であり、今後の基準ともなり得る研究である。</p>		
学力の確認の結果の 要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行った。</p> <p>整形外科学に関し種々の質問を行い、臨床的側面、特に脊椎椎体骨折の治療に関して詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。</p> <p>また、専攻の学術領域に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、臨床研究における倫理的配慮を充分に行い、更に他施設との共同研究を企画するなど、研究指導能力も十分であることを認めた。</p> <p>外国語は英語について試問を行い、椎体骨折の重症度に国際的基準を導入していること、英文文献の詳細なレビューを行っていること、既に国際学会発表を行っていることなど外国語を利用する能力があることを認めた。</p> <p>よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。</p>		




学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	戸山 真吾
審 査 員	主 査	戸田 修二	
	副 査	平田 憲	
	副 査	松島 俊夫	
論文題名	<p>題 名</p> <p>Long-term results of carbon ion radiation therapy for locally advanced or unfavorably located choroidal melanoma: usefulness of CT-based 2-port orthogonal therapy for reducing the incidence of neovascular glaucoma</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>International Journal of Radiation Oncology Biology Physics 86:270-6, 2013</p>		
論文審査結果の 要旨	<p>脈絡膜悪性黒色腫に対する炭素イオン線治療の5年生存率、局所制御率、眼球温存率、治療に伴う合併症としての血管新生緑内障（NVG）の発生率について、以下のように検討している。また、1門照射群と2門照射群との比較検討を行っている。114症例を対象にCTを用いた治療計画を行い、総線量60-85GyE（5回分割照射）、1門照射（63症例）、2門照射（51症例）で比較検討した。</p> <p>本研究によると、5年生存率は80.4%、5年局所制御率は92.8%、5年眼球温存率は92.8%であり、他施設の結果とほぼ同様であった。全体の3年NVG発生率は29.7%であり、1門照射群（41.6%）に比較して2門照射群（13.9%）ではNVG発生率が有意に低下していた。また、50GyE以上照射された症例の虹彩毛様体の体積が0.1ml以上の群は、有意にNVGの発生率が増加した。この結果は、脈絡膜悪性黒色腫の放射線治療では2門照射による治療がNVGの合併症発生率を低下させる手段とし有用であることを示唆している。</p> <p>よって本論文は、博士（医学）の学位論文として価値あるものと認めた。</p>		
学力の確認の結果の 要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行った。</p> <p>放射線医学に関し、種々質問を行い、特に放射線療法、悪性黒色腫の生物学について詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。</p> <p>また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。</p> <p>外国語は英語について試問を行ったが、外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。</p> <p>よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。</p>		




学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	河 野 俊 介
審 査 員		主 査	堀川悦夫
		副 査	浅見豊子
		副 査	倉岡晃夫
論文題名	Failure Analysis of Alumina on Alumina Total Hip Arthroplasty With a Layered Acetabular Component Minimum Ten-Year Follow-Up Study Shunsuke Kawano MD, Motoki Sonohata MD, PhD, Takafumi Shimazaki MD, PhD, Masaru Kitajima MD, PhD, Masaaki Mawatari MD, PhD, Takao Hotokebuchi MD, PhD The Journal of Arthroplasty (2013) in Press		
論文審査結果の 要旨	<p>人工股関節全置換術(Total Hip Arthroplasty:THA)は、股関節症の疼痛と機能障害を改善する術式であるが、人工関節摺動面の磨耗や磨耗粉による骨融解、ゆるみが問題となる。その解決のために開発された Alumina Bearing Surface (ABS) System においても、ceramic liner 破損や脱臼等が発生したためその危険因子を明らかにし、今後の人工関節開発や臨床応用に寄与することが研究の目的である。</p> <p>【対象および方法】1998年から2000年ABSでTHA施行した163例196股を対象とした。手術時平均年齢は59.7歳、平均経過観察期間は11.3年であった。術後成績として、術後合併症、implant破損数などの集計、そしてend pointをceramic implant問題による再/全再置換としてKaplan-Mier法で分析した。また、implant破損の有無を従属変数、年齢・性別・身長・体重・原疾患・術前股関節可動域・implant各サイズや術後脱臼などを独立変数として危険因子を解析した。</p> <p>【結果】生存率はimplant不具合による再置換術で71%、全再置換術で68%であった。implant破損の危険因子は、単変量解析で年齢、身長、術前伸展可動域、脱臼が有意、多変量解析では脱臼による破損リスクが、オッズ比6.2倍であった。</p> <p>【考察】ceramic implant破損危険因子として、若年齢、高身長、術前伸展可動域、脱臼の合併が算出され、高活動度、トルク増大、脱臼や整復時のceramic同士の衝突が破損危険因子として示唆された。また、これら以外の要因として、ceramic摺動面間に発生するmeniscus力(静止時荷重圧迫により摺動面の液体膜によって生じる吸着力)、そしてABSの形状そのものも破損の一因と考えられる。</p> <p>先行研究から、ceramic摺動面に関してmonoblock liner、taper lock固定型implantの成績は安定しており、材質改良や適切なクリアランスの設定により更なる長期成績の向上が期待され、今後の人工関節開発の資料となる結果である。</p>		
学力の確認の結果の 要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行った。</p> <p>整形外科学、特に股関節症、人工股関節置換術、更に人工関節の構造や力学的解析について詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。</p> <p>専攻学術に関し、大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、臨床研究の実績などから研究指導能力も十分であることを認めた。</p> <p>外国語については、英語について試問を行い、海外の研究動向について十分な情報を得ているなど外国語文献を自由に利用し得ること、更に国際学会での関連研究発表実績から研究者として必要な語学能力があることを認めた。</p> <p>よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。</p>		




学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	岩 村 高 志
審 査 員	主 査	坂 口 嘉 郎	
	副 査	市 場 正 良	
	副 査	井 上 聡	
論文題名	An Utstein-style Examination of Out-of-hospital Cardiac Arrest Patients in Saga Prefecture, Japan Journal of Nippon Medical School, 80(3), 184-191, 2013		
論文審査結果の 要旨	<p>院外心停止症例の記録であるウツタイン様式は 1991 年以来世界に普及し、わが国でも 2005 年以来全国で集計されているが、地域救急医療システムの評価として十分活用されているとは言えない。本論文はウツタインデータを用い、佐賀県の院外心停止症例の実態を調査し、地区別救急医療システムの問題点を考察したものである。</p> <p>2010年7月から2011年6月まで1年間の佐賀県のウツタインデータ 800 例について、A～E の 5 地区別に自己心拍再開率と患者年齢、性別、心停止の原因、発生場所、救急隊現着時心電図波形、病着時波形、目撃の有無、市民による蘇生の有無、司令室からの電話による口頭指示の有無、病着前の医療行為、搬送時間との関係を解析した。自己心拍再開率は D・E 地区が有意に低かった。現着までの応答時間は A・D・E 地区が有意に短かった。口頭指示率は E 地区が有意に低く、市民による蘇生実施率は A・D・E 地区が有意に低かった。</p> <p>因果関係の解析は不十分であるが、司令室からの口頭指示、市民による蘇生実施率が低いことが D・E 地区で自己心拍再開率が低いことに影響していると考えられた。一方、5 地区全般において、蘇生処置の口頭指示がある場合約 70%の市民は蘇生を施行するが、口頭指示がない場合 90%近い率で実施されないという状況が明らかになった。</p> <p>本研究の結果より、司令室からの口頭指示の充実により救命率をさらに向上させる可能性があることが示唆された。佐賀県の心停止症例の救急医療システムの課題を明らかにした意義のある新しい知見と考えられる。よって、本論文は、博士（医学）の学位論文として価値あるものと認めた。</p>		
学力の確認の結 果の要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行った。</p> <p>各審査員から、研究背景、研究方法、結果の解釈、本研究の独創性、今後の研究課題等について様々な質問を行ったが、いずれについても本研究を遂行したこと、今後、研究を発展させ得ることを示す回答を得た。</p> <p>また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。</p> <p>よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。</p>		




学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	緒方敦之
審 査 員		主 査 森田茂樹	
		副 査 野出孝一	
		副 査 河島雅到	
論文題名	<p>題 名 Carotid artery stenting without post-stenting balloon dilatation</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Journal of NeuroInterventional Surgery 0:1-4, (published online September 7, 2013)</p>		
論文審査結果の 要旨	<p>頸動脈狭窄症にたいする頸動脈ステント留置術 (carotid artery stenting: CAS) は頸動脈内膜剥離術に代わる低侵襲血管内治療としてひろく行われるようになったが、周術期の脳梗塞が CAS の合併症として重要である。脳梗塞は CAS の手技のうち後拡張のときに主に発症しているといわれており、本研究は後拡張を省略した CAS の成績について検討している。</p> <p>後拡張を省略した CAS 169 患者 176 例が対象であり、そのうち症候性病変は 108 例、無症候性病変は 68 例だった。30 日以内の脳梗塞発症例は 4 例、2.3% であり、その内訳は無症候性病変の脳梗塞 1 例、症候性病変の脳梗塞 1 例、頭蓋内出血 2 例であった。心筋梗塞や病院死亡はなかった。MRI-DWI 高信号の出現は 26 例であった。研究対象 176 例全例で CAS 後 1 年以上の経過観察が可能であり、CAS 後 31 日から 1 年以内に脳卒中を来した例は 2 例、再狭窄は 6 例であった。遠位塞栓の防止のために 2 種類のデバイス (フィルタープロテクションとバルーンプロテクション) が用いられたが、デバイスの種類による合併症の頻度の差は見られなかった。</p> <p>本研究の結果は、従来の後拡張を伴う CAS に比べて脳梗塞の合併症が低率であること、また術後の中期の再狭窄の合併症が受容範囲内のものであったことなどより、現況のデバイスや技術をもってすれば後拡張を行わなくても CAS において満足すべき結果が得られることを実証たものであり、臨床的に意義のある論文である。</p> <p>よって本論文は、博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認めた。</p>		
学力の確認の結果の 要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行った。</p> <p>審査員より、研究の背景や意義、また関連領域全般に関する種々の質問がなされたが、的確で明快な解答が得られた。また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。</p> <p>外国語は英語について試問を行ったが、外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した</p>		


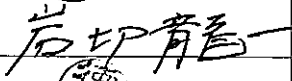

学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	麓 英征
審 査 員	主 査	尾山 純一	
	副 査	坂口 嘉郎	
	副 査	野出 孝一	
論文題名	<p>題 名 IN VIVO ACUTE PERFORMANCE OF THE CLEVELAND CLINIC SELF REGULATING CONTINUOUS FLOW TOTAL ARTIFICIAL HEART</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 The Journal of Heart and Lung Transplantation, 29, 21-26, 2010</p>		
論文審査結果の 要旨	<p>本論文は、自己制御システムを兼ね備えた定常流型完全人工心臓を開発し、急性実験によるパフォーマンスを、牛への移植を行い検討している。</p> <p>これによると、移植は問題なく行われ、体血管抵抗及び肺血管抵抗を変動させながらポンプ機能の変化を検討・測定し、良好な生体内での作動を確認している。本研究において、左心系及び右心系のバランスを自己制御するポンプであり、軸索浮動型であることから、血栓形成傾向が低いことも確認されている。また、ポンプの回転数を変動させることで、拍動流を形成することで、現在の定常流ポンプの問題点を改善しようという意欲的な取り組みもなされていることが、大変重要で科学的に刮目に値する研究といえる。</p> <p>以上の成績は、今後の人工心臓の開発や臨床応用に向けた知見を加えたものであり、有意義なものであると考えられる。</p> <p>よって本論文は、博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認めた。</p>		
学力の確認の結果の 要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行った。</p> <p>循環器学に関し、種々質問を行い、特に人工心臓の開発の問題点や今後に向けての重点などについて詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。</p> <p>また、専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、研究指導する能力も十分であることを認めた。</p> <p>外国語は英語について試問を行ったが、適切な英文論文の執筆と外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。</p> <p>よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。</p>		

学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	谷口 一登
審 査 員	主 査	成澤 寛 (署名)	
	副 査	吉田 裕樹 (署名)	
	副 査	多田 芳史 (署名)	
論文題名	<p>題 名 Interleukin 33 Is Induced by Tumor Necrosis Factor α and Interferon γ in Keratinocytes and Contributes to Allergic Contact Dermatitis</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Journal of Investigational Allergology & Clinical Immunology, 23(6), 428-434, 2013</p>		
論文審査結果の 要旨	<p>本論文は, IL-33 産生を誘導する因子を同定し, IL-33 及びその誘導因子のアレルギー性接触皮膚炎における機能を解析し, 新しい治療戦略の可能性について述べている。</p> <p>まず, アレルギー性接触皮膚炎に関与する種々のサイトカインで正常ヒトケラチノサイト細胞株である KERTr 細胞を刺激し, IL-33 mRNA 発現, 蛋白産生誘導をそれぞれリアルタイム PCR 及び免疫染色, ウェスタンブロットで解析した。次に C57BL/6 マウスを 4-ethoxymethylene-2-phenyl-2-oxazolin-5-one で感作・誘発によりアレルギー性接触皮膚炎モデルマウスを作製し, 中和抗体を用いて IL-33 及びその誘導因子の機能を解析した。その結果, TNF-α と IFN-γ は KERTr 細胞における IL-33 mRNA 発現と蛋白産生を誘導した。抗 IL-33 抗体, 抗 TNF-α 抗体, 抗 IFN-γ 抗体をアレルギー性接触皮膚炎モデルマウスの患部に皮下注射すると炎症所見は抑制された。</p> <p>以上の成績は, TNF-α と IFN-γ がケラチノサイトにおける IL-33 の誘導因子であることをあらしめ, IL-33, TNF-α と IFN-γ 阻害はアレルギー性接触皮膚炎の新しい治療戦略となりうる可能性を示唆しており, 新しい知見を加えたものであり, 意義あるものと考えられる。</p> <p>よって本論文は, 博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認めた。</p>		
学力の確認の結果の 要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行った。</p> <p>基礎および臨床医学に関し, 種々質問を行い, 特に免疫学について詳しい説明を求めたが, いずれについても満足すべき答弁を得た。</p> <p>また, 専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し, かつ, 研究指導する能力も十分であることを認められた。</p> <p>外国語は英語について試問を行ったが, 外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。</p> <p>よって, 審査員合議のうえ, 本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。</p>		

学位論文審査及び最終試験の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	大枝 敏
審 査 員	主 査	安西 慶三	
	副 査	岩切 龍一	
	副 査	徳丸 直郎	
論文題名	<p>題 名 Survival Advantage of Radiofrequency Ablation for Hepatocellular Carcinoma: Comparison with ethanol Injection (肝細胞癌に対するラジオ波焼灼術の生存予後への有効性：エタノール注入療法との比較) 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Hepato-gastroenterology, 60, Epub ahead of print, 2013</p>		
論文審査結果の 要旨	<p>本論文は肝細胞癌(HCC)に局所治療におけるラジオ波焼灼術(RFA)とエタノール注入療法(PEI)を長期予後と比較して有用性を述べている。</p> <p>1990年から2004年までに佐賀大学医学部附属病院にて初発HCCに対して局所療法を行った213例が対象。解析は対象3年以上経過を追えた190症例(PEI 98, RFA 92)。累積生存率は2群間に有意差を認めなかったが、Stage II症例ではRFA群ではPEI群に比する医籍生存率が高かった($P=0.033$)。腫瘍個数が単発症例は累積生存率に有意差はないが、多発症例はRFA群が高かった($p=0.0028$)。同様に腫瘍径が20mm以下の症例は有意差はないが、21-30mmの症例はRFA群が高かった($p=0.040$)。Cox比例ハザードモデルを用いた多変量解析を行うと、Stage II症例でRFAは生存予後に関する独立した因子に抽出された。</p> <p>この結果Stage II症例に対して、RFAはPEIより長期予後に優れていると治療であると考えられた。</p> <p>本論文はHCCの局所療法である2000年まで頻用されていたPEIと2000年以降に主流となったRFAを比較した論文であり、超音波機器の進化や術者の技量など比較しがたい要素はあるが、臨床的に重要な論文と評価し得る。</p> <p>申請者はこの研究において対象症例の選定、データ抽出とデータベース化、統計学的解析、論文執筆まで行っている。</p> <p>よって本論文は、博士(医学)の学位論文として価値あるものと認めた。</p>		
最終試験の結果 の要旨	<p>最終試験において、各審査員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。</p> <p>よって、審査員合議のうえ、大学院医学系研究科博士課程の最終試験に合格と決定した。</p>		




学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	富田由紀子
審 査 員	主 査	青木 淳介 (青木)	
	副 査	高木 比由志 (高木)	
	副 査	江口 有一郎 (江口)	
論文題名	題 名 Identification of 62-kDa protein as an immunogenic antigen of <i>Vibrio vulnificus</i> for humans Fukuoka Acta Medica 104 (7):222 – 233, 2013.		
論文審査結果の 要旨	<p>背景：本研究は、北部九州・有明海沿岸で発生頻度が高い <i>Vibrio vulnificus</i> 感染症のワクチンによる予防法の開発を将来的展望に含んだ研究背景を有する。抗菌薬治療にも関わらず本感染症の多くが劇症型の壊死性筋膜炎を発症し死亡率が 60%にも達することを考えると、ワクチンによる感染予防という本研究の着眼点は十分に意義があると考えられる。</p> <p>目的：本研究の目的は免疫原性を有する <i>V. vulnificus</i> の菌体タンパクの同定にある。</p> <p>方法：同感染症患者 (VUL) 10 名、high-risk control としての <i>V. vulnificus</i> 非感染慢性肝疾患患者 (CLD) 26 名、low-risk control としての肝機能正常者 (NLF) 10 名が研究対象となった。VUL 群では急性期および回復期の血清を、CLD と NLF 群は随時血清を検体として、それぞれ、VUL 患者群より分離された <i>V. vulnificus</i> 菌株の菌体 membrane protein および cytosolic protein との immunoblot が施行された。なお、<i>V. vulnificus</i> の菌種同定は phenotype に加え、16SrRNA の genotype 解析でも確認されている。</p> <p>結果：VUL 患者の回復期血清には急性期血清に比較して分子量 62kDa のタンパクが明らかに増加している。特に発症 12 日目から 25 日目にかけて本タンパク分画が経時的に増加していることが densitometer を用いた半定量法で確認された。抗ヒト IgG 抗体を二次抗体として用いた発色系による解析結果に基づき、このタンパクは <i>V. vulnificus</i> に対するヒト IgG 抗体であることが推察されている。なお、CLD 群の一部にも同分子量に相当するタンパク分画を僅かながら有する者が認められ、<i>E. coli</i> 等の対照菌種の一部の菌体タンパクにも同じ反応が認められたが、それぞれ同菌による不顕性感染、および cross reaction の可能性が否定できないことも discussion において適正に考察されている。</p> <p>以上の結果より本論文は博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認める。</p>		
学力の確認の結 果の要旨	<p>富田氏による研究内容・結果についての presentation の後、今回の研究主方法である immunoblot の原理と手技、結果解釈、本研究の今後の発展のための課題について審査員より種々の質問を行い、いずれについても適切な回答を得ることができた。</p> <p>専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、かつ、<i>V. vulnificus</i> 感染症に関する過去の副論文も十分に臨床科学的な内容であると判断された。また、英語による文献を自由に利用しうる能力があることも確認できた。</p> <p>よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了した者と同等以上の学力があると判定した。</p>		

学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	樋渡 敦
審 査 員		主 査	森田 茂樹 (審)
		副 査	伊川 浩二 (審)
		副 査	尾山 純一 (審)
論文題名	<p>題 名 PCI using a 4-Fr “Child” guide catheter in a “mother” guide catheter: Kyushu KIWAMI ST registry</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Catheterization and Cardiovascular Interventions, 76, 9191-923, 2010</p>		
論文審査結果の要旨	<p>本論文は, 冠動脈のカテーテル治療でのステント留置困難症例を対象として, 新しく開発された 4Fr. ストレートカテーテル (KIWAMI ST01) を用いたステント留置の有効性を多施設共同の臨床研究によって検証したものである。</p> <p>2009 年 10 月から 2010 年 3 月までに Kyushu KIWAMI ST Registry に参加している 6 施設において行われた経皮的冠動脈形成術 (PCI) 症例のうち通常の方法で病変までステントが挿入できず, KIWAMI ST01 を用いてステント留置を試みた 32 例 45 病変を対象とした臨床研究である。挿入方法として直接挿入法, バルーンアンカー法, Pushmi-pullyu 法のいずれかが用いられた。</p> <p>全ての病変でステントの挿入に成功しており, いずれの症例においてもステントの脱落は認められなかった。KIWAMI ST01 は従来のカテーテルに比べて細くて柔軟であるにもかかわらず, ステントレスメッシュ構造による内腔保持性が高いことが全例においてステントを挿入することができた理由であると考察されている。</p> <p>以上の成績は, 冠動脈の血管内治療に関して新しい知見を加えたものであり, 意義あるものと考えられる。 よって本論文は, 博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認めた</p>		
学力の確認の結果の要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行った。</p> <p>循環器病学に関し, 種々質問を行い, 特に冠動脈病変の治療について詳しい説明を求めたが, いずれについても満足すべき答弁を得た。また, 専攻学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同年以上の学識を有し, かつ, 研究指導する能力も十分であることを認めた。</p> <p>外国語は英語について試問を行ったが, 外国語文献を自由に利用しうる能力があることを認めた。</p> <p>よって, 審査員合議のうえ, 本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。</p>		

学位論文審査及び学力の確認の結果の要旨

報告番号 乙	第 号	氏 名	森本 忠嗣
審 査 員		主 査	倉岡 晃夫 
		副 査	浅見 豊子 
		副 査	河島 雅到 
論文題名	<p>題 名 The termination level of the conus medullaris and lumbosacral transitional vertebrae</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Journal of Orthopaedic Science 18: 878-884, 2013</p>		
論文審査結果の 要旨	<p>本論文は、若年者（44 歳未満）の腰部椎間板ヘルニア手術例 379 例の単純 X 線像と MRI 所見に基づいて、脊髄円錐下端高位（TLCM; termination level of conus medullaris）と腰仙椎部移行椎の関係を検討したものである。</p> <p>これによると、正常群 310 例の TLCM の平均的ポジションが L1 中央部に存在するのに対し、L4/移行椎群（第 5 腰椎の仙椎化）28 例では L1 頭側部に、L5/移行椎群（第 1 仙椎の腰椎化）41 例では L1 尾側部に存在しており、L4/移行椎群の TLCM は正常群より頭側に（$P < 0.001$）、L5/移行椎群の TLCM は正常群より尾側に（$P < 0.001$）各々偏位することが明らかとなった。</p> <p>以上の結果は、腰仙椎部移行椎の存在が TLCM のバリエーションに影響を与えることを示唆し、L1 破裂骨折など胸腰椎移行部の外傷における様々な神経学的症候の解離を説明する手がかりとなり得る。特に本論文は、研究対象を脊椎変形の少ない若年者に限定することにより、L5/移行椎が TLCM に影響を及ぼすことを明らかにした初めての報告であり、意義あるものと考えられる。</p> <p>よって本論文は、博士（医学）の学位論文として価値あるものと認めた。</p>		
学力の確認の結果の 要旨	<p>学力の確認は口頭試問により行った。</p> <p>腰仙椎部移行椎の定義、同定法、TLCM のバリエーションなどに関し、種々質問を行い、特にこれらの臨床的意義について詳しい説明を求めたが、いずれについても満足すべき答弁を得た。</p> <p>また、その他の専門的学術に関しても大学院博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の学識を有し、研究を遂行する能力とともに、外国語文献を自由に利用して欧文論文を作成する能力も充分であることを認めた。</p> <p>よって、審査員合議のうえ、本研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力があるものと判定した。</p>		